



私の思い出写真館

ゴールデンルール



藤重 貞慶

ライオン
取締役会長

私が国際事業本部長時代だった1998年のことです。インドネシアに工場を建設している最中に、ジャカルタで暴動が発生し、死者1,200名以上の大惨事となりました。私は暴動翌日、全駐在員に帰国指示を出しましたが、ベテランの現地社員から「若い者だけを帰して、自分は現地スタッフがいるから残りたい」という返事が返ってきました。確かに、これまでの先輩が営々と築き上げてきた信頼が一気に無に帰してしまうかもしれない…。しかしながら私は「人命には代えられません。今すぐ全駐在員に強制帰国を命令します」と伝えました。大混乱の中、大手企業では当社が最初の帰国を果たしました。その後、日本政府が帰国勧告に切り替え、ほぼすべての企業が帰国したことを考えると、この時の私の判断は正しいものだったと確信しています。

事態収束後、一番早く現地復帰したのも当社でした。私は強制帰国命令を出したことを謝罪



1998年、通貨危機に対するアセアン各国のパートナーとの会議のひとコマ。左から4人目が筆者。

するため、いち早く現地パートナーに会いに行きましたが、意外にも感謝の言葉が返ってきました。今回の暴動では、華人であるパートナーも、一族郎党を連れて国外に脱出し、間一髪で難を逃れたとのことでした。もしあの時、混乱の中でライオン社員が残っていたら、彼らは日本人を国外に脱出させることは大変難しかっただろうし、さらなる困難を強いられたかもしれない、と言っていました。

われわれ日本人には、日本人ならではの美徳があります。思いやりや助け合いの精神も世界に自慢できるものだと思います。しかしながら、国際ビジネスの世界においては「自分の身は自分で守る」これがグローバル社会のゴールデンルールです。「自分はこれだけ頑張っているのだから、いざというときは誰かが助けてくれる」という考え方が必ずしも通用しない。このことを再認識し、肝に銘じる重要な機会となりました。